

乳幼児の言語発達に関する臨床的研究 II*

言語発達の基礎的要因に関する検討

佐々加代子

はじめに

言語発達に関する研究において、筆者は前報 I²⁾で、子どもの発達を言語能力以外の面を含めたひとつの全体的な輪廓としてみながら、子どもとまわりの人や物との相互反応の変遷としてみたもの、特に乳児期の母子関係の形成・充実・発展に焦点を当ててとらえており、そのメカニズム及びそれを基盤として代表される人間関係の展開を以下のように整理した。

1. 人間の成長のプロセスを2つの要因の合力と考える。即ち、1) 生物としてのヒトの特徴 B (Biological Development of Human-being), 2) 成長過程における人間関係 Hr (Human-relation) の合力である。

2. 人間関係の展開についての考え方は、松村の関係弁証法に基づいて考えた。

3. 人間関係の展開の手がかりは、両者に交わされる信号行動である。

4. 信号行動を言語という視点でながめ直し、1) 触覚的な信号、2) 視覚的な信号、非言語行動、3) 聴覚的な信号、音声、話しことば、に整理し、1), 2), 3) の順位で人の行動を誘導するものであると考える。

5. 信号行動の受けとめ方のタイプを6つのタイプ(①事実の容認, ②賛同, ③後悔, ④驚愕, ⑤反発, 拒否, ⑥無視)に分類した。これらを関係の展開という視点で整理すると、①～②へのプロセスに変化していくことが関係の展開に速くつながるものである。

6. 人間関係の展開は、乳児期の母子関係に代表されるように、互いの信号行動を理解して動き合うということで展開する。

7. 正常乳幼児の発達への対ひと行動の発達の様相を0～2歳まで、信号行動と関係の展開という視点で整理した。

しかしながら、従来の言語発達の様相をとらえる視点である、音声、語い、文構造、構音などの発達とのつながりについてはまだ論じていなかった。これは、乳児期において最も重要視される母子関係に代表される人間関係の展開がその後の言語発達と関連性があると言っているだけにすぎないということに気づいた。

そこで本研究では、乳児期の母子関係に代表される人間関係の展開がのちの、いわゆる言語発達とどのようなつながりをもつのか、ということに視点を定める。

* この報告は、昭和57年度白梅学園短期大学研究助成金の一部によるものである。ここに感謝の意を表します。

＜乳幼児の言語発達＞

I. 言語発達について

子どもの成長（成熟過程）は身体発達、神経系など人間としての成熟方向に向かっていくということはよく知られている⁴⁾が、筆者は、子どもの成長のプロセスについて B (Biological Development of Human-being) と Hr (Human-relation) の合力である、という考え方を図示してきた。言語発達に関しても、この、B と Hr の二要因により形成されると考える。

音声の形成過程⁸⁾、語い¹⁰⁾、文構造⁹⁾、文の量⁸⁾、文の長さ、構音の発達過程などの先行研究成果は、子どもの、いわゆる生物としてのヒトの成熟過程とも重ね合わせて考えられ、とりわけ、人間関係（乳児期においては母子関係）の影響を大きくうけた結果である、ということである。

ところで、初語以降の言語発達の様相においては、先で表わした先行研究が多いが、初語以前の0～1歳頃までの研究については、音声の形成過程の研究が主であり、人間関係の展開において母子相互間で交わされる信号行動が、のちの言語発達とつながるものである、という観点からみたものは少ない⁶⁾¹²⁾。

一方、言語発達の遅れを問題として相談に訪れる子どもたちは少なくはない。筆者らの¹⁶⁾¹⁷⁾研究において、その問題を以下のように診てすすめてきた。今の子どもは、まだ自分の気持ちを人に知らせるとか、人の気持ちを受けとめるというようなコミュニケーション関係が育っていないと思われること、即ち、生後1年～1年半の間に育つはずの、一番身近な人である母親に対する信頼・愛着がまだ十分に育っていないと考えること、そこでその育ちそびれた母子の関係をこの時点から（乳児期の体験）を再体験させることによってやり直し、母親に「なつく」という間柄を充実・発展させていくことが、いわゆる話しことばの発達段階に至るまでの基盤を形成することになる。

ところが、いわゆる正常発達の子どものたちの言語発達に至るまでの過程にあるできごとと、それらの子どもたちのように、ある程度成長してからの母子関係の過程にあるできごととの、読みとりの難かしさというものが問題としてあることと、筆者自身の体験¹⁶⁾¹⁷⁾においても、子どもの人間関係の様相をみながらも、いわゆる従来の診断¹⁵⁾を重視しながらかかわってきたという事実がある。

乳幼児の言語発達に関して、母子関係に代表される人間関係の展開の内容がその基盤であれば、言語臨床における診断・治療過程においてもその点が色濃く出てもいいはずである。それが余り出されていないというのは、筆者自身にも、言語発達と人間関係の展開という連なりというものが不明確であった、ということに他ならない。

そこで、筆者自身の研究成果¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁶⁾¹⁷⁾を、言語発達に関する先行研究と照らし合わせることによって、言語発達の様相を明らかにしたいと考える。

II. 話しことばの発達

言語発達については、初期においては、話しことばについて論じられることが多い。話しことばの発達は、従来は、初語以降を指すことが多いが、筆者は、0～1歳までの、その子どもが人として成長する基盤の時期を含めて考える。これは、人間の成長と言語の関

係について述べた事柄¹²⁾¹³⁾と重なり合うものだからである。

話しことばの発達の時期を概観すれば以下のように3期に分けて考えられる。

第1期；話しことばとパーソナリティー土壌の形成の時期（0：0～1：2歳）

第2期；話しことばの確立の時期（1：2～3：0歳）

第3期；国語学習の基盤の形成の時期（3：0～6：0歳）

本報では、その第1期について検討を加える。

1. 言語発達における信号行動

村井⁸⁾は乳児の音声の発達研究で、非叫喚発声（non-crying）を人間の言語形成過程の基礎としている。叫喚（crying）をきわめて動物的なものとし、「この発声は何らの信号の意味をもたない無意味発声」ととらえている。しかし、前報の乳児期の信号行動をみると、人間が育つ過程においては、その信号行動（分類3）も初期の育児者への育児行動を誘導するものである。母子相互の関係の展開において、きっかけになりうるのは、3)の聴覚的な信号行動が多く、両者の間柄の展開がより密接になりうるものは、1)の触覚的信号行動と2)の視覚的信号行動である。

たとえば、項目2，生後一週め，元気よくお乳を吸う（信号行動の種類1，以下同様），項目11，0：1，安全に抱かれていますとおとなしい（1，2），項目22，抱きぐせがつく（1，2，3）項目27，0：4，乳を飲むとき，哺乳びんや乳房をさわったりする（1，2），項目30，0：4，抱いたときなどに大人の顔をいじる（1），項目32，0：4，添い寝の習性がつく（1，3）項目45，0：6，人見知りをする——保育者にしがみついてその不安をしずめる——（1，2，3）など。

この時期の保育者の留意事項は、乳児の不安を解消し、快適な状況の維持・保障にある。育児行動の誘導には、信号行動が有効に働く。表Iは、そのさまの例を示した。

表I. 母子のやりとり¹⁸⁾と信号行動

子ども		お母さん
(信号行動3) 泣く	→	せわをする
(信号行動2) 泣きやむ	←	(信号行動1, 2, 3) } (子どもが泣いたりぐずったりしたらいつでもすぐ
(信号行動2, 3) ぐずる	→	抱く, ゆする
(信号行動2) 機嫌が直る	←	(信号行動1) } に)
(信号行動2) 笑う	→	あやす
	←	(信号行動1, 2, 3) } (子どもが喜ぶほどたくさ
(信号行動2) じっと眼をみつめる	→	語りかける
	←	(信号行動3) } んやり, いやがればすぐやめる。自分自身も楽しんでやっている)
(信号行動3) 声をだす	→	よく聞く (じゃましない。どんな発声でもとがめないで喜んで聞く)
	←	
移動する	→	ほめる (信号行動2, 3) 助ける, 危くなくようふうする。
	←	

2. 人間関係の展開における Hr (Human-relation) の要素

子どもをとりまく Hr (人間関係) は、母親、父親、兄弟姉妹、祖父母、近所の人々というように、さまざまにある。子どもとの関係を展開していく上で、周囲の者たちがどの

ような要素を働かせることが、時間軸の中でより質的な発達をもたらすのであろうか。

子どもの言語発達を促進させる要素としての Hr の問題は、1) 保育者の資質、2) かかわり方 (接し方の質的な問題)、3) かかわる量であろう。

1) 保育者の資質

エインスワース¹⁾は、自分の赤ちゃんに随伴的に応答することのできる敏感な母親 (sensitive mother) と応答の下手な鈍感な母親 (insensitive mother) について以下のよう述べている。

敏感な母親は、赤ちゃんの立場からものをみることができる。彼女は、赤ちゃんからの信号を受信するために同調されている。彼女は、その信号を正確に理解し迅速かつ、適切に応答する。彼女はその赤ちゃんが欲しがっているように思われるものをほとんどいつも与えるが、そうでないときは、気転をきかせ、赤ちゃんのコミュニケーションを認めたり、納得しうる代用品を与える。彼女は、赤ちゃんの信号とコミュニケーションに対して随伴的に応答する。鈍感な母親は、彼女自身の願望、気分、および活動によって、ほとんど一方的に相互交渉を開始したり、中断したりする。彼女は、赤ちゃんのコミュニケーションの意味するところを曲解して、自分の願望、防衛的観点から解釈し、あるいはまったく応答しないというような傾向がある。

このことは保育者の質について指摘していると思われる。

人間関係の展開という視点でみてみると、乳児から出される信号行動に対する母親の受けとめ方は、常に受けとめ方のタイプ¹²⁾ 1, 2 である。(先の質の良い保育者の場合) 生後3か月頃までは、世話のし方にとまどいながらも、子どもからの信号行動を手がかりに快適な状況を維持・保障しようと動く。母親がかかわることで子どもの不快状態から快状態へと転化できたときに、自らも心地よくなり、両者に快適状況の共有体験が成立する。保育者にはこの上ない喜びの体験ともなる。子どもからのさまざまな信号行動の、いわば“読みとり”とその“読みの効果”というものが保育者に貯えられ、育児行動への自信とつながっていく。この信号行動の読みとりと、その効果が展開しない場合には、次の育児行動への不安につながり、両者の関係は負 (マイナス) の展開方向へ向かうことは言うまでもない。両者の間柄が相互に展開して初めて、関係が深まるのである。その間柄において、両者から出される信号行動が有効に働いているのである。

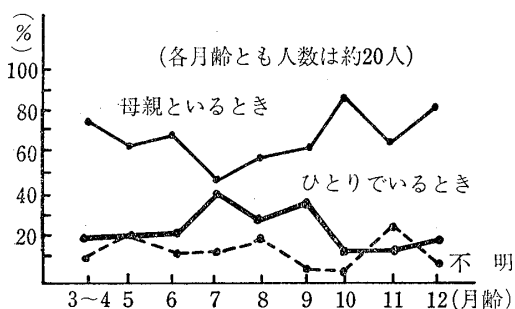


図 I. ひとりしゃべりと、人がいるときの幼児の発声 (村井による)

図 I は乳児が母親という時に音声活動が活発になっていることを示している。言語発達に有効に働くのは明白であろう。

2) かかわり方 (接し方の質)

保育者のかかわり方が質を決めるので、かかわり方には 1) の保育者の資質が問われてくる。子どもとの間柄の展開には、どのようにかかわるといいのか、ということを考えることになる (関係展開については前報で述べた¹²⁾)。相手の子どもの動き

(信号行動) に誘導されて動くということと、自らも応答性の豊かな人であることである。

スターン¹⁴⁾は不一致のいくつかのタイプを論じている。その一つは、応答的でない親 (unresponsive parent) である。このような親は、子どもの世話は一応するが、そのやり方が随伴的でも、相互的でも、敏感でも、社会的遊びが好きでもないのである。もう一

つの一般的な型は、干渉的な親 (intrusive parent) である。干渉的な親は絶えず乳児を刺激し、遊ばせるが、それは一方向的であって、乳児が相互交渉で役割を果たす機会を奪ってしまっている。スターンはこれを“追いかけ——逃げまわり (chase-and-dodge)”のパターンと呼んでいる。これでは両者の間柄が展開しないのは言うまでもない。

言語行動に関しては、増井⁶⁾が0:4～0:7の乳児をもつ母親の、乳児に対する発語の特徴について6項目にまとめている。

- (1) ためらいやいいなおしがほとんどなく、単純で短く、文法的に整っているが、決してかた苦しい方ではなく、会話体としても自然な型である。
- (2) 音・語・文のくりかえしが多い。
- (3) 構音や文の長さなどは、従来の言語発達尺度にあてはめると、2～5歳級に該当するが、全体としては明瞭でわかりやすい。
- (4) 抑揚・リズムなどは独特であり、聞かせたいことばにはストレスが置かれ、その前後のことばは非常にメロディックである。
- (5) 乳児の発声に対してはその真似をする、あいづちをうつ、問い返す、などの型で反応し、乳児の発声を尊重している。
- (6) 乳児の発声量が多いと、母親のことばは、ことばのモデルを与えるような刺激としてよりは、発声を励ますような刺激の型で与えられることが多くなるようである。

子どもの行動に誘導され、自らも快適状況の中で、何げなく言った発語行動を整理したものである。言語発達において、語りかけの問題を出されているが、そのかわり方のもつ意味の背景には両者の間柄において、相互に交わされる信号行動が有効に働いているということが前提条件となる。受けとめる相手の喜ぶ反応(受けとめ方のタイプ2)あってこそなのである。

松田⁷⁾はあやし行動¹³⁾が、母子相互の間柄の展開に意義深いものであることを述べている。どのような子どもにおいてもこの活動が有効であるという報告がある³⁾⁵⁾。また言語臨床実践においても¹⁶⁾¹⁷⁾有効である体験を数多くもっている。このあやし行動も両者の間柄が“安定”した状況において成立している、ということは重要なことである。

3) かかわる量

乳児の発達過程において、保育者はその多くの時間を、介護(世話)に当てている。図Ⅱ-1～3²⁾は家庭における0～2歳児の、生活時間を示すものである。乳幼児の生活の時間の過ごし方は、保育者がその時間帯にどのようなつきあいをしているのかということを読みとることができる。出生直後から身体発達などに伴い授乳、排泄などの介護やその他の保護のさまも変化するが、“常に目が離せない”状況にある。このことは、母子相互の間柄の距離をちぢめることと、量的にも大量にかかわりあっているということを意味している。

しかし、ただ単に量的に刺激を与えればよいというものではなく、かかわる場合に応答性の豊かな、保育者であることが望まれるのは言うまでもない。

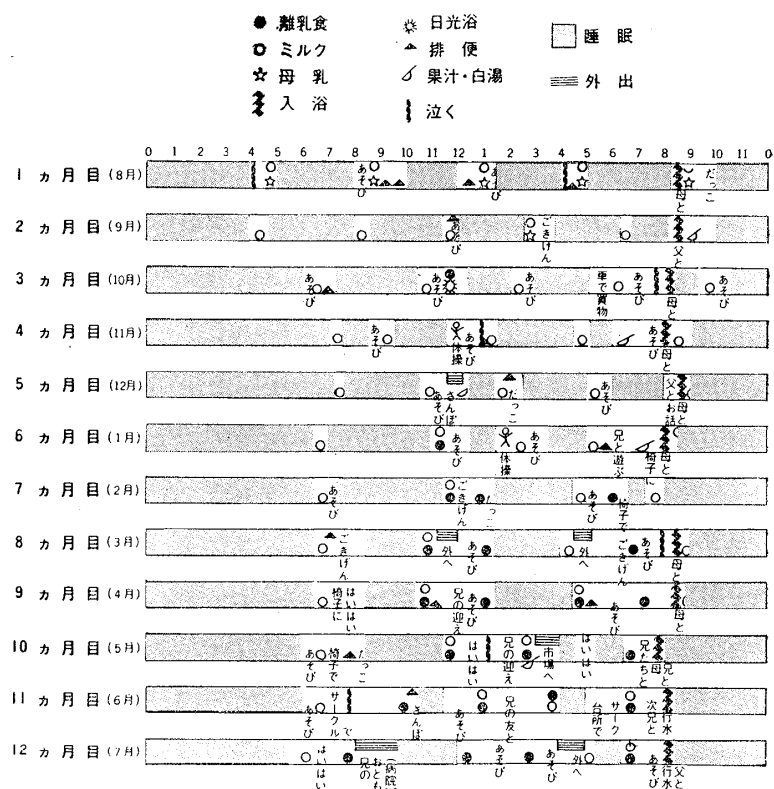


図 II-1 0 歳の生活時間 婦人之友編集部²⁾

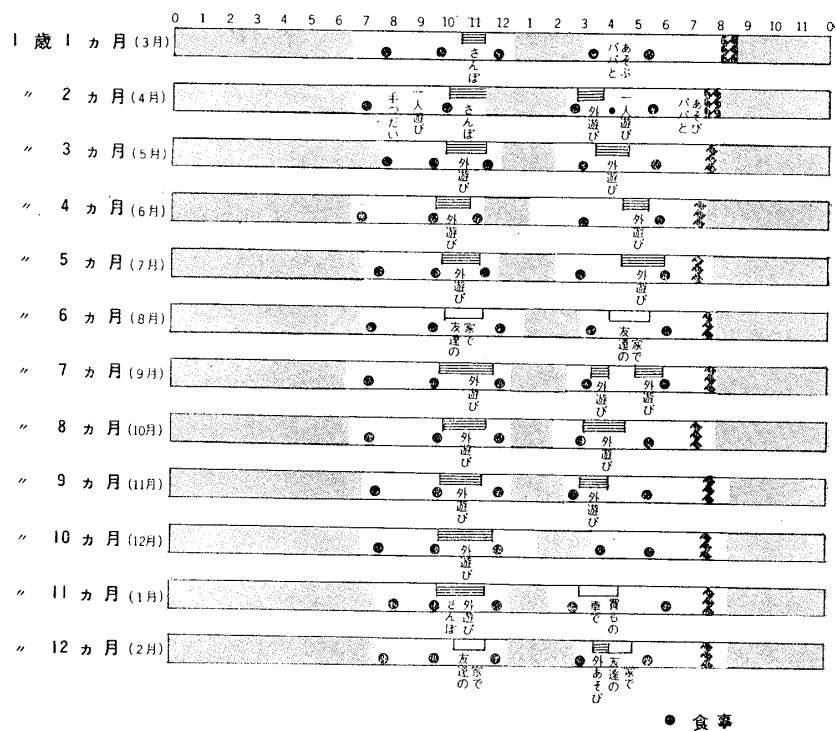
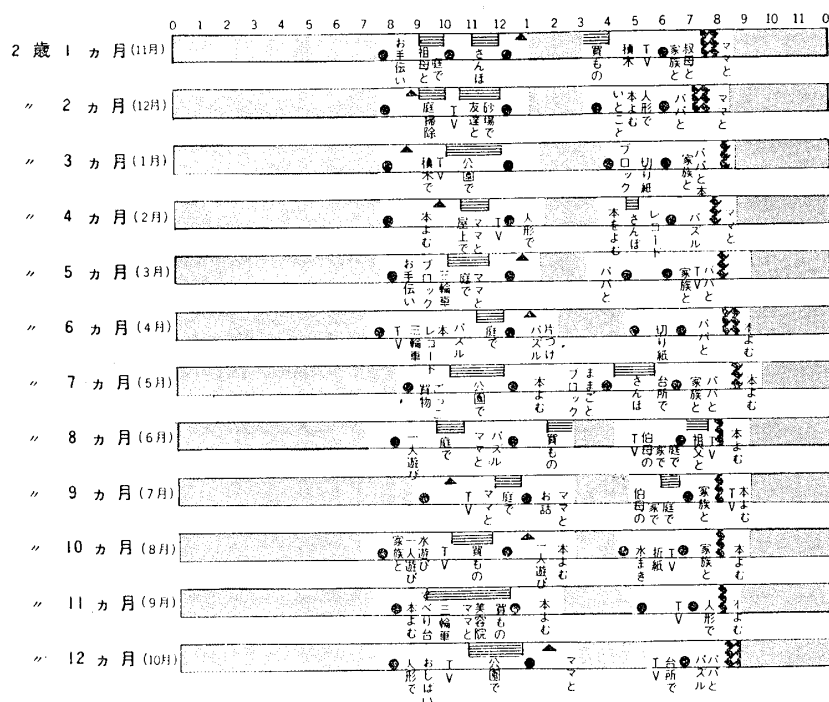


図 II-2 1 歳の生活時間 婦人之友編集部²⁾



図II-3 2歳の生活時間 婦人之友編集部²⁾

＜言語発達遅滞児らにおける言語発達＞

I. 対ひと行動の発達と言語発達

言語発達遅滞児らの言語発達に関しても、対ひと（人）行動の発達とのつながりでとらえる¹²⁾。今現在出会っている子どもの発語行動において（語い量，文構造，構音の発達など）いわゆる言語発達診断ができて，話しことばの基盤となる，土壌の部分が満たされていない場合には，その発語というものは，その子どもが生物学的な発達に伴って表われたものであり，いわば“見かけ”の言語であるという見方をする。人間関係の展開にかかわる信号行動の種類やその機能を関係の展開という視点で考えることが手がかりとなる。

子どもの年齢にかかわらず、母子の間柄の育て直しを実践した既報¹¹⁾¹⁶⁾¹⁷⁾の子どもたちについて、この信号行動という観点からとらえ直してみた。表Ⅱである。出会い以後、母子の間柄の育て直しの実践経過の良い子どもたち(NO. 1, 3, 4, 10, 13, 16)には触覚的信号行動の手がかりが多い。たとえば NO. 10 のゆうちゃんの母親とのつながりの変化を取り出すと、

この1年4ヶ月の間に、離れると泣く（発達質問紙では、0：2以下同じ）、あやすと顔を見て笑う、あやされると静まる、人をじっとみつめる、人の言うことをじっとよく聞く、家族が喜んで笑った自分の動作を何回もくり返す（0：2）、抱きぐせがついたかのように抱かれることを好む、母親がいなくなると泣いて捜す、人ごみで手が離れると急に捜して手をつなぐ、指しゃぶりを始める。ちょっとしたことでよく泣くようになる、添い寝を喜ぶ、母親が手をさしのべると喜んで自分からからだをのり出す（1：0）、母親の体などを探索する、禁じられていることをわざとして母親の注意をひく。そしてコロコロなど言われるとおもしろがって、わざとする（0：6）、母親のあとを追い、少しの間でも離れることをいやがる（0：9）、人見知りを始める（0：6）、“指さしして人に知らせる”とか“指さしして人に命令する”ことが多くなる、母親のしぐさのまねをする（テーブルをふくまねや食事）、人に食べさせて喜ぶ（1：3）、外に

表Ⅱ 言語発達遅滞児の出会いの場面における信号行動の分類

No.	子どもの名前	出会った時の年齢	ページ*	信号行動の分類		
				3. 聴覚的信号, 音声, 声, ことば	2. 視覚的信号, 非言語行動	1. 触覚的信号
1.	W. ひろしくん	3歳8ヶ月	42	小さいうなるような声を出している。発声量は少なく掛け声ことばがない。	ささやき声で語りかけると気持ちよさそうにしている。	体をさすられたり、触れられたりするこや、とくに、大きく揺らしてもらうことを喜ぶ。
2.	M. いっちゃん	2歳6ヶ月	48	声は出すが発声量は少ない。掛け声ことばはない。まわりの者に聞きたい。く。「パッパ」などと言うことがある。絵を見せて、「〜はどれ」と問う」と「タイタイ(金魚)」「ニャンニャン」「トケイ」を指すことができる。母親に問いかけるように絵を指さし「アッア」と言う。	何もしない時、ピアノをひく時の指先のように、指を変えながら下唇のあちこちをリズムカルにさわる。	ものがない時にくすぐるとキャッキョッと笑い、期待して待つことがある。
3.	I. みっちゃん	3歳6ヶ月	55	「ちょうだい」と言ってそのものを指さしたり、ゼスチュアを交えることがわかるが、ことばだけで言うことと反応がない。「どれ」と絵を見せて聞いても反応がないが、自分の目と絵の中の目のマッチングはできる。おもちゃを持ち「ウーアー」と抑揚のある声を出す。発声量そのものは少ない。遊具で遊んでいる時はおとなしいが、自分ひとりでまがもたなくなるとワーワーとぐずる。	相手になるとその人の目を見て喜ぶ。	くすぐりに行くことを期待して待ち、ケタケタと笑う。母親の膝に坐る。
4.	S. じんちゃん	4歳8ヶ月	63	使えることばがママ、パパ、ダッコなど少なくとも2〜3語はある。「オミミは？」など身体の部分の何回も聞くと、耳、鼻などわかることがあるという。パンチキックをさわりながら「ッテッテッテッ」とか「ブッブッアッ」などと言うが、その声ことばは回りの者にわかりにくい。「バイバイ」と言うとき手を振りながら「バーバー」と言う。持っていることばを自分から使ってみるということがあまり見られない。	指導者がドタドタと音をたてながら、追いかけてくるようにすると、こにここと笑い期待して身がまえる。	だっこされると母親の首にかじりつめる。指しゃぶりもする。時々母親の顔に鼻をつけにいたり、くすぐられたり、背中をさすられたりすることもある。
5.	H. たっちゃん	3歳10ヶ月	67	ことばの理解、文の構成能力、ことばのやりとりなど、言語そのものの発達はほぼ年齢並み。ささやき声が聞き分けられる。声が全体として小さく、ひどく鼻にかかっている。口を大きくあけて話すということがない。構音でややはっきりしているのは母音とそれに近い2・3の音で、声門破裂音を広い範囲にわたって代用しており、よほど慣れた人でないと内容がよく理解できない。	初めての場所や人には緊張して泣いてこわがるなど慣れにくく、いつも伏し目がちにしていて、相手の話を顔色もうかがいながら聞いている。	(3歳ごろから母親に甘えるようになったという)。
6.	K. まこちゃん	3歳5ヶ月	69	現在いえることばは最近おぼえたもので、ブー(自動車)、コッコ(ニワトリ)、アチ(あつい)、ワン(犬)など、10語たらずである。発声量が少ない。掛け声ことばがない。自動車の絵を指さして「ブー」と言うが「〜はどれ」と聞くと、その場を離れる。父親が「まこちゃんほらワンワン」と犬の絵を指さすと	自分の手に字、絵を描いてもらうとその絵を見てキャーキャー笑う。追いかけてやレスリングのまねをし遊ぶとキャッキョッと笑い、視線が合うがその間、時々、自分の目の前で指先を折りながらキーキーという声を出して、その指を見ている。	

7.	Y. かっちゃん	6歳 5ヶ月	80	「アッケテ」「バナナ」「ジュース」「アメ」など10～20語程度。何か人にしてほしい時には、「アッケテ」らしいことを言い、その人の顔をちょっとなぞったりする。発声量は多くはない。キャーヒーという声を出す。		初めての人のにだっこされて、哺乳瓶で飲ませてもらうと、とても安定しているし、あやし活動などを喜ぶ。
8.	K. かずちゃん	3歳 4ヶ月	86	「ワンワン」「ブーブ」などのことばをもっているが、使うことができない。発声量は少なく、掛け声ことばがない。「ちょうだい」のことばかけにも反応がない。TVが大好きでCMを見ながら「セイブ」「シャンプー」などと言う。絵本を見せて「～はどれ」と聞いても答えない。ささやき声を聞きわけることもある。		背中をさすられたりすると気持ちよさそうにしているが人の目が自分の目の前にくると避ける。抱こうとすると手足をバタつかせ、からだを固くする。
9.	N. プーちゃん	3歳 11ヶ月	101	抑揚のある声をたくさん出す。子ども声のまねるとよく聞き、その後で声を出す。ぐずり声やうれしい時の笑い声などがかなり出る。意味があつてかどうかかわからないが、「ママ」「パパ」など言うことがある。「ごはんよ」「お風呂よ」などちょうどその時間に言うとうわわっているようだ。	指を折り曲げる、指と指をからませ、指で目をギュッと押す、口の奥に手を入れる、歯ぎしりをする。	初めて出会う指導者に抱かれ、ベタベタと体をくっつけている。体がふれあう遊びが好きなようだ。
10.	K. ゆうちゃん	4歳 11ヶ月	103	「ちょうだい」とことばをかけることと持っているものを、さし出すこともある。小さい声でひとりごとを言っている、発声量は少なく、掛け声ことばがない。ときどき指導者のことばを、そのまま、まねる。昨日、TVで見たという場面の「助けてよー」「お師匠さま」怪獣番組の「デビルマン」などのことばを言う。	表情に変化が少なく、活動中ほとんど人の顔はみない、視線はあわなない。音がでるのが、うれしいのか、音のでるトンカチで自分の頭や体、人の頭をたたいてケラケラ笑う。人を見ていることを通してあとからその動きをまねていることがある。	追いかけてつこをやるとキャーキャー言って逃げる。体をさわられたり、触れられたりするうれしそうである。初めて出会う人でも気持ちよくし、のよいことを通して通じあえる可能性がある。
11.	I. てっちゃん	4歳 3ヶ月	109	2語文が言えるようになったのは3歳6ヶ月頃、その後ことばがふえてきた。初めての人のに対して言うことばは、声が小さく聞きとりにくい。長いことばになるとグニャグニャに聞こえる。掛け声ことばを言うが、発声量は少ない。物の名称はだいたいわかるが、なぜかそのような「水の中を泳ぐものはどれ」という問はわからない。遊び行動の中で「イナイヨ」「アッタ」「コレモイレテネ」「ホライタイタ」などが言えている。	初めての場や人に慣れにくく、はにかんでいるようである。人のすることうをく見ている、まねることが出来る。	2歳頃、言語のことで相談センターに行った時、「直接、接触を保つように」と言われた。せせせと母とのきずなを強くすることを心がけたところ、母子の歯車が合うようになってきた、という。
12.	N. かずおみくん	3歳 6ヶ月	113	最近になって「パパ」「ママ」「ブー」「ガーガ」など30語程度言うようになり、そのことばは使える。「ポン」「エイ」などの掛け声ことばも言う。発声量は少ない。人の言ったことばをまねる。言うべきことばの最初や最後の1～2音を言う。絵本を指さしながら「ブー」、車が衝突している絵を見てチャン（ガチャン）の意味などを言う。おへそ、おっぱい、目、耳、口など身体の部分の名を理解する。	人の顔はあまり見ない。人と遊んでいる途中や、ある種のCMを見たときにギュッと目をつむり、両手で耳をふさぐような動作をすることがある。	

13.	Y. やったん	3歳 1ヶ月	115	発声はほとんどない。	おんぶ、だっこをしてももらいたい時、人の前や後に行き、両手をあげる。人の顔は見ない。	くすぐった時に少し笑い声が聞かれる。おんぶ、だっこをしてもらう。
14.	K. あきちゃん	5歳 7ヶ月	130	駅に関係のあるひとりごとを言う。駅のアナウンスに非常に詳しい。突然「11歳になったら、上諏訪に家をたてるんだ」などと言う。絵を見せて「～はどれ」と言うとき、別の指さしたり違ったことを言う。ふたつの絵があると逆に名前を言う。構音の誤りが多く、s, z, j, 3, ts, dz, tj, dz, rなどに置き換えており不明瞭。舌たらずな、しゃべり方でぎこちない。声も大きくリズムやメロディーに不自然さがある。ことばは「～イイデテュカ」「～デゴディアイマティユ」などの紋切型。遊びの中で、ことばかけに対する反応から言語発達はほぼ年齢並みと思われた。	初めて出会う人の視線を避ける。	子どもを膝の上に抱いていっしょに絵本を読むと安定しているように見える。
15.	J. ゆうちゃん	4歳 0ヶ月	149	きげんの悪い時や疲れた時に「ウー」と声を出してぐずる。「お鼻は」「お口は」と問われると絵の中の、その部分を指さしすることができ、ムーミンの絵を見て母親から簡単な話をしてもらおうと、よく聞いている。	あいさつには、手をキラキラさせる。気分がよい時も、胸に手をあてる、サインをする。	人柄が良く、人といっしょにして、楽しむことを、とても喜ぶ。母親との気持ちのつながりは、よく保たれているとみられる。
16.	I. マンガちゃん	14歳 7ヵ月	151	発声量も少なく、わずかな発声も人には聞きとりにくい。	人から視線をそらす。表情に変化がない。指しゃぶり、舌を吸うなどの自己活動がしばしば見られる。	初めて出会う人でも、気持ちのよいことと身体を触れられることをしてもらうことを通して、通じあえる可能性がある。

* 田口恒夫編 (1975) 言語発達の臨床, 光生館 (文献番号16) に表わした, 筆者が担当した子どもたちの事例報告の頁を示す。

遊びに出かけ、時々母親の顔を見てまた外に行く、という順序で変化し、今は自分ひとりで外に出かけて遊ぶことができるようになったが、母親とは今でも母親が外に出かけるときはいっしょに行く、とくに家でベタベタと甘え「お母さん、お母さん」とさかんにやってもらっている。

となっている。ほぼ順調に母子の間柄が展開しているということがわかる。

これは出会った当時のゆうちゃんが人とつきあう出発点がもてたことと、その対象の人にすぐ母親になることができたこと（応答性の豊かな保育者、受けとめ方のタイプ1, 2に転換）で量的にも質的にも母子の接触体験が保障されたことでその間柄の展開につながったものと考えられる。

表Ⅲは、その後に会った子どもたち¹⁷⁾のものである。人と一緒に楽しむという遊びはほとんどしないという記述のある4、だいちゃん、5、めいちゃんは、その後の変化の過程において接触体験が人との間柄の展開における出発点となる、ということ気づかせてくれた子どもである。

表Ⅱ, Ⅲで例示した子どもたちに対して、言語発達に関する臨床の方針を、母子の間柄

表Ⅲ 言語発達遅滞児の出会いの場面における信号行動の分類

No.	子どもの名前	出会った時の年齢	ページ*	信号行動の分類		
				3. 聴覚的信号, 音声, 声, ことば	2. 視覚的信号, 非言語行動	1. 触覚的信号
1	O.とおるちゃん	3歳1ヶ月	74	初めての場面で「ウー」というややピッチの低い力んだ声を出す。「ダメ」と軽く言っても「ウー」と力を入れて力む。	初めての人に出会うと視線を避ける。見ないようにする。初めての場面では、ウロウロと部屋の中を動き回り、ピョンピョンとびはねたり、部屋のすみに行き、ぐるんと横になる。ウーというややピッチの低い力んだ声を出して走る。時々、両手のこぶしに力を入れて力んでみたり、床にうつぶせになり、両手を額に当ててじっとしている。時間がたつにつれて、その頻度が増えていく。母親のそばに来て、声を出さず、別の方向を見ているので、子どもの要求が母親には、わかりにくい。「ダメ」と言っても「ウー」と力を入れて力み、表情がこわばってくる。	母親がせっせとあやし行動をやってあげると喜ぶが、そのあとポツンと切れたようになる。
2	H.よりちゃん	3歳10ヶ月	104	母親が絵から目をそらすと、それを感じて母親の目を見て、母親の手をとって「アーアー」と言う。	指導者が母親と話しをしながら、それとなく子どもを観察していると、だんだんそばに近寄ってくる。指導者が、そおと顔を上に向けると目が合っていない。一瞬、体をビクッとさせたあと、じっと見つめる。人形の絵を見ている。母親が「かわいいおめめね。おくつもはいてるね、よりちゃんおてて…」と子どもの手をとって握手をしようとすると、母親からサッと目をはずし窓の方を見る。	指導者の顔をピチャピチャたたいたり、ひっかいたりする。母親の手をとる。
3	M.つよしちゃん	3歳11ヶ月	108	カ行音、ガ行音は言える。ほとんど、一、二語文。内容は半分程度わかる。発声量は少ない。声の調節がよくできない。自分の欲しいものは、相手がわかってくれるまで何回でも言う。ものの名称は聞いて指すことができる。筋のある話は、じっと耳を傾けて聞くということがない。ささやき声は、聞きわけられない。	体がヨロヨロし、転びやすい。やりたいことができないと、ぐずりが始め、かんしゃくを起こす。なだめても、なかなかおさまらない。	時々、母親をたたきにくる。突然、人にとびついてきて、ほほを噛む。人に働きかけることが少ない。付き合ってくれる人が、いればだれでもよいようである。

4	M. だいちゃん	5歳 2ヶ月	143	ひらがな, カタカナ, ローマ字, 数字の読み書きができるし, 漢字は70~100字程度読める。本もスラスラと読む。人に読んでもらう場合はエジソンなどの伝記ものを喜ぶ。市販の子ども向きのピクチュアパズルは, アッという間に完成する。歌はすぐ覚え, 音符を見てオルガンをひくことができる。工作や折り紙は説明書の手順を見てつくることができる。国の首府や県庁所在地名を覚えることが, おもしろくてすぐ覚える。星座も見る。4~5語文はしゃべる。構音には問題はないが, 紋切型で抑揚のない単調なしゃべり方をする。	見知らぬ人に対しては目を見ない。今までしゃべっていても人が来ると急におし黙るか, 遊びに没頭する。	人と直接いっしょに遊ぶところとか, ボールを使ってやりとりを, するなどの遊びはほとんどしない。
5	F. めいちゃん	6歳 3ヶ月	146	母親の目をじっと見つめて自分で「めいちゃん, ふざけちゃダメでしょ」と言いながら菓子かんを母親の方に手渡す。「できないよ, できないよ」と言って母親の方を見ないで, 紙袋をあけようとする。4つの絵を見せて「ハトは?」と聞くと, その絵を, それとなく見たあと, 手に持った電車のおもちゃの方を見て「これは何? これは何?」と言う。そのすぐあとで自分の方から「ヤマテセン, ナリタセン, コクテツセン」などとたて続けにしゃべる。床に左手で, 非常階段とか, サモンゴールドSなど看板やCMで見たとおりの形を, まねて書く。	ブランコに乗っている時に, ガタッと全体が動いた時, 一瞬, 目が大きく見開いた。体がこわばっているように見えた。	人といっしょに楽しむという遊びは, ほとんどしない。

* 田口恒夫編 (1977) 言語発達の臨床第2集, 光生館 (文献番号17) に表わした筆者が担当した子どもたちの事例報告の頁を示す

の原点に戻したということが的を得ていたということがうなづけよう。初めての出会いで対人接触がもてたということは, その子どもがそれまでの間に育てていたということが言えよう。一方, 過去からその時点まで, 人との接触体験のもちにくい, 或いはもてない子どもの場合には, コミュニケーションの及び人間関係の出発点までの過程がたいへん時間のかかる子どもであるというとらえ方をすることである。そのような子どもに母親や臨床者からの積極的な接触をもとうとするかかわり方は, スターン¹⁴⁾のいう“追いかけ一逃げまわり”パターンの間柄となる。

表Ⅲに例示した子どもたちは, 当時 Tinbergen²⁰⁾の動因の葛藤についての考え方に示唆を受けたあとに出会っている。接触行動を誘い出すというかかわり方は, 人間関係の展開における出発点ともなっている。

その出発点がもちにくかった, めいちゃんの接近のし方の過程を表Ⅳに示した。信号行動とめいちゃんの受けとめ方のタイプを右欄に記した。

乳幼児の発達過程における信号行動と比較してみると, 項目11 (0:1) 安全に抱かれているとおとなしい, がある。この表Ⅳにおける段階8に相当すると思われる。出会ってから4年半の期間はこのような子どもたちの変化のプロセスにおいてさまざまな問題を含む。即ち, 言語発達の基盤の人間関係を育てる場合, その子どもの対人 (ひと) 行動の発達経過には, それだけの時間がかかるということを含むからである。表Ⅳの右欄にめいちゃんとかかわった筆者の受けとめ方のタイプとそのときの子どもの対する気持を記した。

表Ⅳ 子どもと私との距離と接近のし方の過程及び信号行動と受けとめ方のタイプ

		めいちゃんとかかわり	時間的経過	信号の種類	めいちゃん私を受けとめ方のタイプ	私の気持ち	持
段階1	その場にたちつくす	体がこわばり、目を大きく見開く。目を見開き、まばたきをしない。	初めての出会い 初めての訪問	2	4	1	一瞬、ドキッとしながらおどろかせないよう配慮する。
段階2	私から離れる、後向きの姿勢	私から8mほど離れた場後に後向きにすわる、時々、体の向きを変え、私の方をチラッと見る。		2	1	1, (2)	前向きの姿勢にドキドキしながら嬉しくなる。私も観察しやすくなる。
段階3	私を遠くからみつめる、前向きの姿勢	私の近く(2~3m)まで寄ってくる。私が目を向けると走り去り、10mほど離れた場に居る、目が合う、伏せる。	2~3か月後	2	3	1, (2)	どういう体勢で接するといったのか、とまどいながらも、子どもの反応(信号行動2)を、手がかりとしながら、かわっている。
段階4	少し近づいてくる、私を観察する	3~4mのところまで近づき、イスのまわりをグルグルまわり、チラッと見たりする「へは?」と問いかけることが増えてきた。	1年半	2, 3	1, 2	1, 2	子どもからの情報量がふえてくることで、かわり方が、ふえてくる。
段階5	近距離(1~2m)に居て、私を観察する、距離が近くなる	「これ何?」と本の中のものを指して聞いたり、TVや体験したことの中でわからなかったこと、おもしろかったことなどについてくり返し話しかけてくる	2年め	3	1, 2	1, 2	くり返しの反応を私も楽しめるようになってくる。
段階6	私を探索する	私のすわっているイスをさわったり、私の持ち物を取り出してきてさわる、私の方を見る、話をする。	3年目	(1), 3	1, 2	1, 2	距離的に近いところでも子どものさまざまな情報が得られて嬉しくなる。
段階7	私を十分に探索する	たたく、ける、かむ、ひつかく、ひっぱる、押すなど、力まかせにする。力は弱まり、私の反応を確認する。	4年半め (→1か月連続) (→1か月半連続)	1	1~4	1, 2	初めての時に、少々びくつきながらも初めでの接触体験を、大切にしようと思う。毎回、子どもが守れるかどうか、出会うまでが不安。会うとやりとりのし方がわかる。守れてよかったですと安心する。
段階8	私を受けとめる	私の言うことを聞きとめる。			1, 2	1, 2	ゆとりをもつてやりとりができる。自分の子どものような気がしてくる。
段階9	私を自分に引き寄せる、体験を共有させる	本のある場につれて行き、本の質問をする、外行動について行かせる、その場で見たこと、体験したことを話し、私の話を聞きとめる。				1, 2	めいちゃんの内面の世界へさそわれている気持。お互いに心の対話をしているような気持になる。やりとり行動がスムーズになる。
段階10	私から他の人へのひろがり						

間柄の展開のむずかしい子どもの場合の、保育者側の条件の一部であろうと思われる。

2. 臨床過程における変化の節のとりえ方

子どもの変化過程は、母子関係の間柄の展開における信号行動の変化をおさえることとなる。その変化の節を、以下のように5期に分けて考えることが、その過程をとらえるときに明確になる。

- 1) I期：模索期
- 2) II期：接触体験期
- 3) III期：共有体験期
- 4) IV期：弁別不安期
- 5) V期：安定期（母子のきづなの確立期、話しことばの芽とも言われる指さし行動の出現）

臨床経過中にみる対人（ひと）行動の発達はゆうちゃんの場合に記したように、乳幼児の発達項目に準じることが多いが間柄を展開する上では種々の難題が多い。

保育者側がその出発を機にできるだけ早い機会に安定した状態でかかわることが必要である。この上述の節の第1期で子どもと母親のどちらもが模索状態がつづくとその後の展開はなかなかかはばしくはいかないものである。母子関係の発達過程と照らし合わせて考えると、このI期は0:0～0:3頃と準じ、両者が互いの信号行動を手がかりにお互いのつきあい方がわかってくる頃である。第II期は、0:0～0:6頃まで、第III期は0:3～0:6頃、第IV期は0:6～0:10頃、第V期は0:10～1:2頃となる。

臨床過程において、それぞれの期の節目が重要であり、ゆうちゃんの場合には、IV期までがほぼ順調に展開してきたと言えよう。その後の経過をみると、IV期以降の展開に問題があったようである。

臨床で出会う子どもたちの場合、母子の間柄の展開があると、それに伴って今までできていなかった、たとえば日常生活動作や排泄、遊び行動などができるようになってくる。それが母親たちからみると“発達”のしるしとして嬉しいこととしてうけとめる一方、手をかけていかなくなる、ということも事実のようである。

ところで、その時期とほぼ同じ頃の乳幼児の発達をみてみると、0:6～0:8頃には次のようなことが表われている。項目45前後の信号行動の種類をみてみると、まだ1～3の種類が多く表われている。項目48（0:6）抱かれたとき、抱いている人の洋服をしっかりと握っている、項目54（0:7）こわいものを見たり聞いたりしたとき、母親にしがみつ、項目57（0:7）、抱きあげるととても喜んで顔をなめまわし、手でいたずらをする、項目62（0:8）、よく抱いてくれる人をみると、からだをのりだす、に見出すことができ、大人たちが子どもとの距離をちぢめてくれたときに、初めてその信号行動が意味をもつ。0:10になるまでの間、の4か月間は、子どもがさまざまなことで不安を感じたとしても、その不安を自ら解消する手だての1つとして指しゃぶりをする、ということをしていたとしても、この4か月間というものが子どもたちにとっての大きなネックポイントになるようである。

しんごちゃん¹¹⁾の場合の変化過程において、IV期からV期以降への展開がみられたのは、初期から子どもに母親との距離をゼロにする手だてとしての1つの信号行動（オッパ

イを吸うこと)をもっていたこと、距離をちぢめるということを子ども自身がしていったことと、母親自身も受けとめてかかわっていたからであろう。触覚的な信号行動が両者をつなぎ合わせる意味ある信号行動であったことは言うまでもない。経過上の記録をその観点だけでみても(表V)、子どもと母親との距離はほぼいつもゼロに等しい動き方をしており、しかも量的に確保するように動いている。その両者の関係の展開があって、そこで、その他の面も育ってきたということがわかる。

3. 言語発達について

子どもたちは臨床で出会うまでに何年かを経過している。言語発達に関連する信号行動の種類も1~3が見うけられるが、先で述べたように、“人”とのきっかけは見出せても、本人自らの強い1の信号行動というものはほとんど見受けられない。2は、かかわり方の修正を促してくれる信号行動としての意味をもつが、不快な反応に分類してもよいものがほとんどである。体の動きで示されるものは、人がくっついていれば本人の不快感を即座に察知して何とか、快状況にと動いてつきあうことが可能であるが(乳幼児の場合の項目4(0:1)おこると手足をバタつかせて大声で泣くなど)、距離的に離れていると、その意味内容が伝わっても、保育者がすぐに行動すると、その信号発信者に対して、その信号への受けとめ方のタイプが4~5になることが多く、両者の関係は展開していかない。

長い間生きていくということは、その子どもがそれなりに、生物としてのヒトの発達経過があるので、その発達に見合った育ちをしているものである。そのことが、従来の言語発達を計測する尺度にある程度当てはまると、語い量、文構造、構音の発達の内容がつかめることになる。しかし、そこで得られたデータを、いわゆる標準値の差としてとらえ、その差を示している時期に戻ったつきあい方をすることは、その後の言語発達を育ててはいかない。“見かけ”の言語発達になるのである。臨床体験では、母子の間柄を育てていると、初期に示された言語を基にその上につみあげられて語い量、声がふえてはいる。しかし、それで測ると、母子の間柄との関連性を初期からみていないのと同様の結果となる。母子の間柄の発達過程のⅡ~Ⅳ期に問題がありのび悩んだ子どもたちの場合に、一語文以降がなかなかのびてこないことや、ピッチの高さが変わらないこと、助詞が使えない、ということで再び問題を出されることが多いからである。

正常乳幼児の発達過程において、0~1歳までを話しことばとパーソナリティーの土壌の時期としたように、この時期の母子に代表される人間関係の展開が0:10になるまでの間、Ⅳ期終了Ⅴ期に至るまでその子どもの、いわゆる言語面の発達は、どういう変化の過程を示したのか、ということを、母子の間柄の展開の記述と共に記録に残しておくことによって、その連関の問題はあとでわかってくるものと考ええる。

表Ⅴ しんごちゃんの母親との間柄の(行動展開)項目と変化の節

経 過	母親との間柄についての行動記録	変化の節	備 考
6ヶ月目	<ul style="list-style-type: none"> ・母親がどこへ行くときでもくっついていく。(ごみを捨てる時、買物) ・母親の移動と共におもちゃを持って移動する。 ・何げなく母親の膝の上に坐りにくる。 ・気がつくという。 ・ごはんを食べていると膝の上にくる。 ・ふとん敷くと母親の背中にのってくる。 ・母親の鼻の穴に指をつっこんだりする。 ・おっぱいを出してペチャペチャたたいたりする。 ・夜寝る時もオッパイをさわったりしゃぶったりしている。 	Ⅰ期	
7ヶ月目	<ul style="list-style-type: none"> ・ますます母親にくっつくようになった。 ・母親の顔に唇をつけることをするようになった。 		
9ヶ月目	<ul style="list-style-type: none"> ・母親が腰かけると、その上に坐り、母親がたつまで坐っている。 ・おんぶをしてもらいたがる。 ・寝る時、母親の顔を自分の方に向けておく。 		
10ヶ月目	<ul style="list-style-type: none"> ・朝、ふとんの中からオカアハーンと呼んで、ふとんに入りてきてもらい、30分程度くっついてから起きる。 ・母親を見つけると、にこっと笑い顔をくっつけにくる。 ・おんぶより、だっこの方をせがむ。 ・外に行く時、おんぶするとすぐに母親の胸のところに手をまわしてくる。 ・こたつの中で母の膝の上にくると、1時間ぐらいいる。 ・母親の目を唇で吸う。 ・外で母親と一緒にブランコに乗る。 	Ⅲ期	
11ヶ月目	<ul style="list-style-type: none"> ・母親にくっついてじっとしていることが多い。 ・同じ敷ふとんに寝る。 ・母親が具合の悪い時、母親のそばでイスなど並べて遊んでいたという。 		
1年目	<ul style="list-style-type: none"> ・おっぱいをまたさわり出した。母親のオッパイをとり出しておもちゃの様に持ってあそんでいる。 ・母親の顔に顔をくっつける。 ・母親の膝の上で寝入ることがある。 ・珍しいものを見つけた時、母親をその場にひっぱっていくことがある。 ・靴下などをさわりにくる。 ・(母親はしんごちゃんの気持ちは100%近くわかるという) 		
1年6ヶ月目	<ul style="list-style-type: none"> ・家事をやっていると「トミカのマチつくろうよ」とか「オカアサン、アンカアタロウよ」などと言って、母親の手をひっぱる。暇そうにしていると膝の上にのり「オカアサン、オカアサン」と言って、ずっと長い間のっている。「ハナ、ハナ」と言いながら母親の顔にくっつける。 ・母親がトイレに入っても、戸をトントンたたいて中に入りてくる。「オカアサン、オカアサン」と言ってくっつきまわっている。 ・外に出た時は、母親の衣服をしっかりつかんでいる。 ・母親を見つけると「ウァーン」を泣いて、しがみつく。 ・母親の目などをつつく。まゆ毛をなめたり、かんだりする。 	Ⅳ期	
1年7ヶ月目	<ul style="list-style-type: none"> ・母親にベタベタすることが、激しくなった。 ・特に母親が家事をしている時には「アンカ」と言って手をひっぱるとか顔をくっつけたり、肩車してくる。 ・母親の動きを見ながら追っかけて、くっつきまわっている。 		
2年目から 2年1ヶ月	一日の生活は6:50ごろ目覚める。母親のオッパイをさわる。母親の目をさわって開ける。	Ⅴ期	1ヶ月間母親が臥っていた自家中毒を起こす
2年8ヶ月	一日の生活は7:00前後に起きてから寝るまで母親のそばにいる。	Ⅴ期	

小 括

本論は乳児期の母子関係に代表される人間関係の展開において、母子相互間で交わされる信号行動が、のちの言語発達とつながるものであるという観点から検討を試みたものである。言語発達を特に話しことばという面から概観すれば以下のように3期に分けて考えられる。

第1期；話しことばとパーソナリティー土壌の形成の時期（0：0～1：2歳）

第2期；話しことばの確立の時期（1：2～3：0歳）

第3期；国語学習の基盤の形成の時期（3：0～6：0歳）

本報ではその第1期について検討を加え、以下のように整理した。

1. 先行研究において明らかにされてきた、言語発達における音声、語い、文構造、構音の変化過程は、前報で表わした子どもの成長のプロセスにおける B (Biological-Development of Human-being) と Hr (Human-relation) の二要因により形成される。
2. 言語発達の1期(0：0～1：2歳)においては、特に3種類の信号行動が有効に働いており、母子の相互関係を展開するものは、とりわけ触覚的な信号が重要な意味をもつ。音声(信号行動3)は叫喚(crying)を含むものである。
3. 言語発達を促進させる要素としての人間関係の問題は、1)保育者の資質、2)かかわり方接し方(の質的なもの)、3)かかわる量の順位で重要である、ということを明らかにした。単に、量的3)に、刺激2)を与えればよいというのではなく、保育者の質1)が問われていることになる。
4. 言語発達遅滞児の言語発達について、対ひと行動の発達の展開と合わせて考える。現在のその子どもの言語の様相は、いわば“見かけ”のものである、ととらえる。人間関係の展開における相互の信号行動が機能的に展開して初めて、その“見かけ”の言語も意味をもつ。子どもの発する信号行動のうちの、触覚的信号(分類1)が相互関係の出発点となる。
5. 治療の方針を「母子関係を育て直す」とした言語発達遅滞児らの信号行動を再分類したところ、触覚的信号行動が母子関係の展開の出発点として確認された。
6. 臨床過程で、触覚的な信号行動の情報が得られなかった子どもたちは、“見かけ”の言語にとらわれていたというまわりの人たちの問題と、触覚的な信号をもち得ないだけの状況の中で生きてきた子どもの側の問題があったということがわかった。
この場合は視覚的な信号行動(分類2)を手かがりに、子どもからの接近行動を待つというかかわり方(Tinbergen ら)が的を得ている。その場合に保育者側の資質が問われるのは言うまでもない。
7. 子どもの変化過程は、母子関係の間柄の展開における信号行動の変化をおさえることとなる。その変化の節を、以下のように5期に分けて考えることが、その過程をとらえるときに明確になる。

- 1) I 期：模索期
- 2) II 期：接触体験期
- 3) III 期：共有体験期

- 4) IV期: 弁別不安期
 - 5) V期: 安定期 (母子のきづなの確立期, 話しことばの芽とも言われる指さし行動の出現)
8. 言語発達遅滞児の場合について, その変化過程をこの節でとらえると, IV期からの展開に問題が多かった。この期に接触体験をふやすことがV期以降の展開とつながる。

参 考 文 献

- 1) Ainsworth, M. D. S., Bell, S. M. and Stayon, D. J. (1971), Individual Differences in Strange Situation Behavior of One-Year-Olds. In H. R. Schaffer, ed., *The Origins of Human Social Reactions*. London and New York: Academic Press, pp. 17-52.
- 2) 婦人之友編集部 (1976), 赤ちゃんの遊びと生活, 婦人の友社.
- 3) J・ゴールドン, 石垣恵美子訳 (1980), 赤ちゃんからのメッセージ, 黎明書房.
- 4) 平山宗宏編 (1979), 講座現代と健康 年齢と健康, 大修館書店.
- 5) ジョン・トレシークリニック編, 今野秀雄, 中野善達監訳 (1977), 母と子のことばの教室, 福村出版.
- 6) 増井美代子 (1967), 乳児期における言語習得過程に関する研究——母親のことばの分析を中心に——, お茶の水女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修士論文.
- 7) 松田美穂 (1972), 乳児期における母子関係の成立と発展に関する研究——母親の“あやし行動”を中心に——, お茶の水女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修士論文.
- 8) 村井潤一 (1978), 言語機能の形成と発達, 風間書房.
- 9) 村田孝次 (1977), 言語発達の心理学, 培風館.
- 10) Robert B. McCall, 二木武監訳 (1981), 0・1・2歳児——, ところとからだの発達, 医歯薬出版.
- 11) 佐々加代子 (1980), 言語発達遅滞児の臨床——しんごちゃんとともに——, 白梅学園短期大学紀要第16号, pp. 90~115.
- 12) 佐々加代子 (1983), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究 I, 言語発達に関するメカニズムの基礎理論の検討, 白梅学園短期大学紀要第19号, pp. 41~68.
- 13) 佐々加代子 (1983), 保育者養成のための言語, パール印刷.
- 14) Stern, D. (1979), *The First Relationship*. Cambridge, Harvard University Press, 岡村佳子訳, 母子関係の出発, サイエンス社.
- 15) 田口恒夫編 (1971), 言語病理学診断法, 協同医書出版社.
- 16) 田口恒夫編, 言語臨床研究会 (1975), 言語発達の臨床第1集, 光生館.
- 17) 田口恒夫編, 言語臨床研究会 (1977), 言語発達の臨床第2集, 光生館.
- 18) 田口恒夫, 増井美代子 (1979), ことばを育てる——ことばの遅れた子の指導——, 日本放送出版協会.
- 19) 田口恒夫他 (1981), テレビ大学講座 言語障害, 旺文社.
- 20) Tinbergen, E. A. and Tinbergen, N. (1972), Early childhood autism an ethological approach. Verley Paul Parey, 田口恒夫訳 (1975), 自閉症——文明社会への動物行動学のアプローチ, 新書館.

さっさ かよこ (児童学)

Summary

A CLINICAL STUDY OF THE SPEECH AND LANGUAGE DEVELOPMENT OF CHILDREN

2. AN EXAMINATION FROM THE VIEW POINT OF THE BASIC FACTORS IN SIGNAL BEHAVIOR.

Kayoko SASSA

The purpose of this study is intended to clear the relation of the signal behaviors and the speech and language development.

1. The development of the speech and language are considered as follows :
 - 1st step ; the stage of formation in speech and personality (0 : 0 ~ 1 : 2 year).
 - 2nd step ; the stage of establishment in speech (1 : 2 ~ 3 : 0 year).
 - 3rd step ; the stage of acquirement in learning of basic language (3 : 0 ~ 6 : 0 year).
2. Signal behaviors of tactile, visual and auditory are promoted by good relationship between mother and infant, especially tactile behaviors are important.
3. Three factors of Human-relation are important in development of the speech and language ; (1) the character of caretaker, (2) the quality of care, (3) the quantity of care.
4. The process of improvement in the retarded children were divided into five stages :
 - 1). the stage of groping.
 - 2). the stage of co-experience of tactile feelings.
 - 3). the stage of development in co-experience.
 - 4). the stage of discrimination and anxiety.
 - 5). the stage of stability (establishment of mother-infant bond).
5. In cases of the retarded children, many troubles occurred in stage 4). In order to improve the troubles mentioned above, it is necessary to increase the tactile behavior.